

特別展示

赤膚焼と奥田木白

展示品解説・目録

於箱本物語館 平成29年12月26日～平成30年3月22日



大和郡山市教育委員会

赤膚焼は、「大和の雅陶」とも呼ばれる優雅な焼き物です。一口に赤膚焼といっても、その作風は多種多様ですが、とりわけ唐津や萩、志野、京焼などの日本の名陶や、朝鮮茶碗、中国青磁などの精巧な写し（コピー）には定評があり、本歌（モデル）を超える作品も数多く見られます。

赤膚焼の起源

赤膚焼のはじまりについては、これまで次のような説がありました。

1. 戦国時代の終わり頃（16世紀末）に、郡山城主であった豊臣秀長が常滑より工人「与九郎」を呼び寄せたのがはじまり（金森得水『本朝陶器攷証』安政4年=1857）
2. 大名であると同時に、作庭家・茶人としても著名な小堀遠州（1579-1647）がはじめた（田内梅軒『陶器考』嘉永7年=1854）
3. 正保年間（1644-48）頃、京焼色絵陶器の祖・野々村仁清（生没年不詳）がはじめた（黒川真頼『工芸志料』明治11年=1878）



図1 柳一丁目で発見された雲華焼の窯跡



図2 雲華焼碗（個人蔵）

以上の諸説によれば、赤膚焼のはじまりは戦国時代末から江戸時代前期（16世紀末～17世紀前葉）ということになります。しかし、これらの説はいずれも幕末から明治にかけて唱えられたものです。また、近年盛んに行われている発掘調査では、戦国時代末から江戸時代中期まで（16世紀末-18世紀）の遺跡から赤膚焼が出土したことはありません。

さらに、享保21年（1736）に出版された『大和志』では地域の特産品を詳しく紹介していますが、そのうち添下郡の「土産」として記載されている焼き物は、「陶壺・埴壇（奈良土風炉）・土盤」の三種類です。すなわち上記2でいう小堀遠州がはじめたとされる窯は、最近柳一丁目で窯跡（図1）が発見された雲華焼¹（図2）のことを指す可能性があります²。

1 厚手の明茶色の地肌に、黒色の斑紋を意図的に付けた焼き物。製品としては奈良土風炉や奈良火鉢が有名。

2 大和郡山市趣味の会が昭和29年（1954）に発行した『赤膚焼由来考』という冊子中では、すでにこの点に関して指摘があります。

寛政の再興（赤膚焼のはじまり）

一方、比較的近年に見いだされた史料（「赤膚焼由来書」）によれば、赤膚焼のはじまりについては次のように記されています。

「堯山」の雅号を持つ郡山藩主・柳沢保光（1753-1817）が、商人の住吉屋平蔵に命じ、郡山大織冠にあった内野六郎左衛門の屋敷に試験室を築いた。この室は天明6年（1786）から寛政元年（1789）までの4年間使用され、実際に作陶にあたったのは信楽の陶工・弥右衛門である。なお、この試験室（大織冠室）で焼かれた製品はまだ「無印物（名称なし）」であった。

この間、平蔵と弥右衛門は郡山の北方・五条（現在の奈良市五条山付近）に本格的な室を築き、寛政元年には生産を開始した（五条山室）。しかし、弥右衛門はほどなく亡くなり、新たに京都五条坂より丸屋活兵衛という陶工が五条山に呼ばれた。活兵衛は名工で、保光より「井上」という名字と「赤膚山」の室号と銅印を拝領した。これが赤膚焼の始まりである。



図3 関連地図（1/50,000）

すなわちこの史料によれば、赤膚焼のはじまりは従来いわれていたように戦国時代末や江戸時代前期ではなく、江戸時代後期頃だということになります。また、その開始には郡山藩（保光）の強い関与があったことから、赤膚焼の窯は、一種の藩窯³だったこともわかります。さらに付け足すと、発掘調査で出土する赤膚焼は、すべて幕末以降です。これらを総合すると、赤膚焼は戦国時代末期や江戸時代前期にはじまったものではなく、江戸後期になってから焼かれ始めたのとみるのが正しいようです。しかし、その前提として、先述の奈良土風炉や雲華焼などの伝統があったことはいうまでもありません。

奥田木白の活躍

柳沢保光（堯山）の肝いりで始まった赤膚焼ですが、文化14年（1817）の堯山の死により、赤膚焼の灯はいったん消えかけます。しかしその十数年後、名工・木白の出現により、赤膚焼を巡る動きは再び活況を呈するようになります。

奥田木白（1800-71）は、赤膚焼を代表する作家です。もともとは専門の陶工ではなく、郡山城下町（堺町）で「柏屋」という荒物商を営む藩の御用商人でした（図4）。本名は武兵衛で、木白という俳号は柏屋の「柏」の字を二つに分けたものです。

3 江戸時代に全国各地の藩が経営した窯のこと。肥前（大分県）の鍋島藩窯などが有名。

木白の陶工としてのデビューは、天保7年(1836)の西大寺奉納楽焼茶碗ですが、木白はそれ以前から柳沢保光(堯山)を取り巻く芸術サロンに名を連ねており、とりわけ藩医であり楽焼の名人であった青木木菟(1778-1859)に師事していました。木白が楽焼茶碗を焼いたのは、先述の大織冠窯であり、この窯は保光(堯山)も使用したと考えられることから、木菟～堯山と木白の関係は深いものだったようです。

木白は嘉永3年(1850)頃、本業も陶器師となりその看板には



と記されていました。すなわち木白は、日本国内や東アジア・東南アジアの名陶をリスペクトし、精巧にコピーすることに長けていました(展示品02・03・05)。そしてその多くは、本歌(モデル)を凌ぐ出来映えです。また、奈良一刀彫奈良人形の名人・森川杜園(1820-94)と親交があり、その作品を精密に陶器に写しました(展示品08)。

一方、木白にはそうした作家としての一面のほか、本業であった商人としても赤膚焼に関与したことが知られています。木白は五条山窯に対して出資し、その製品に関してアドバイスを行っています。先述のように赤膚焼には郡山藩の藩窯としての側面がありますが、それを実際の商業ベースに乗せたのは木白でした。

明治3年(1871)木白は死去し、郡山城下町の円融寺に葬られます(図5・6)。木白の死後は子息の木左が事業を引き継ぎました。木左は父の技量を凌ぐといわれるほどの名人でしたが、明治12年(1879)に早世したため、赤膚焼は衰微します。しかしその伝統は受け継がれ、昭和に入ってから茶道の流行に伴って赤膚焼は再び興隆を迎えます。現在では奈良県下に6つの窯元があります。



図4 柏屋のあった辺り(堺町)



図5 木白の墓がある円融寺(矢田町通)



図6 木白の墓

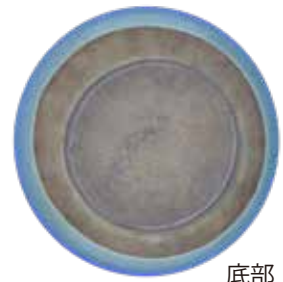
<展示品解説>

01 ^{りよくゆうけんすい} 緑釉建水

口径：8.4cm 器高：7.8cm



印銘



底部

箱蓋裏面



建水とは茶道具の一つで、茶碗をすすいだ湯を捨てる器のこと。「こぼし」とも呼ばれる。本作品は袋形の建水で、底部外面を除き、全体にやや青味を帯びた緑釉が施される。底部高台に「赤ハタ」の瓢筆印が押されている。箱蓋裏面に右に示すような陶磁器研究家・保田憲司氏の箱書きがあり、本作品を奥田木白の作とするが、実際は木白印が捺されていないため、断定することは難しい。

赤ハタ焼 木白作
青地釉砂金袋形建水
幕末大和赤膚山窯に於ける
奥田木白の作まぎれなきものにして青地釉は数少なきもの也
日本陶磁協会理事
大阪陶磁文化研究所長
保田憲司

02 ^{からつうつしてえひいれ} 唐津写鉄絵火入 (木白作)

口径：7.0cm 器高：9.8cm



印銘



底部

箱蓋表面



箱蓋裏面



火入とは茶道の道具で、煙草盆の中央に置き、火種を入れておく器のこと。唐津焼は、肥前（佐賀県西部～長崎県）で焼かれた陶器で、朝鮮半島に起源を持つ。本作品は直線的に立ち上がる筒形の形状を呈し、外面には轆轤目を残している。全体的に灰釉が施され、外面には鉄絵を描く。底部外面は露胎（釉が施されていない部分）とし、唐津焼風の赤茶色の胎土を見せる。唐津焼風の削り出し高台脇に「赤膚山」および「木白」の印が捺されている。箱蓋表面に「木白唐津写」、箱裏に「宣火入」などの箱書があるが、これらは木白自身が書いたもの（共箱）ではない。

03 しのうつしこうごう 志野写香合 (木白作)

一辺：約 4cm 器高：2.3cm



箱蓋表



印銘



香合とは、茶道で用いられる練香を入れる容器のこと。志野焼は、美濃（岐阜県南部）で焼かれた陶器で、表面に長石釉（白色の釉）を施し、鉄絵が描かれている。本作品は、一隅を切った直方体の粘土塊を糸切りして二分した後、身の部分に粘土紐で立ち上がりを受け、蓋の部分にはヘラで凹みを設けている。身から蓋にかけて、連続して鉄絵の草花文が描かれており、その上から長石釉が施されている。底部外面は露胎で、「赤膚山」および「木白」印が捺される。箱は、この作品が当初から入っていた共箱で、箱蓋表面に「志の 香合」「木白造」の墨書があり、さらに「赤膚山」および「木白」の朱印も捺されている。

04 はぎゆうくつがたちやわん 萩釉沓形茶碗 (木白作)

長径：16.5cm 短径：14.7cm 器高：9.3cm



底部



高台部分（割高台）



箱蓋裏



印銘



沓形茶碗とは、轆轤による成形後に器体を押しさえ、木沓のような形にした茶碗である。萩釉とは藁灰を原料とする白色の釉薬で、長州（山口県の西部）の萩焼で用いられた。本作品は、内外面に強い轆轤目を残し、口縁部は外側に厚みを持たせた玉縁としている。内外面に萩釉が施される一方、露胎となる底部はヘラによって大胆に切り割られ、割高台としている。この高台脇に、「赤膚山」および「木白」の印が捺されている。箱蓋裏面に「赤膚山／初代 木白作／奈良飛鳥園／贈 池田氏」という墨書がある。飛鳥園は大正 11 年(1922)創業の奈良の写真館（現存）で、仏像や古建築の写真で著名である。

05 せいじょうつしちやわん 青磁写茶碗 (木白作)

口径：12.0cm
器高：8.3cm



底部



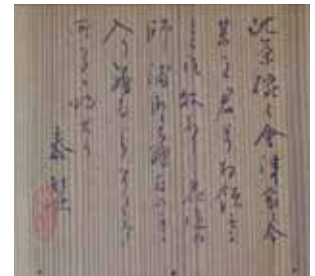
見込



印銘



箱蓋裏面



中国の青磁碗を本歌（モデル）とする、いわゆる珠光茶碗である。外面にヘラで多条刻線を彫り、口縁部内面には雷文を巡らせる。また、見込（内面中央）には八弁の花文が描かれる。全体に緑白色の釉が施されており、高台脇に「赤膚山」および「木白」の印が押される。なお、珠光茶碗とは茶人の村田珠光（1423-1502）が好んだ粗製の中国青磁碗のこと。箱蓋裏に墨書があり、この茶碗の来歴が記されている。記主の「泰麓」は、書家として著名な柳田泰麓（1862-1932）である。

06 ごほんたちづるちやわん 御本立鶴茶碗 (木白作)

口径：12.0cm 器高：9.5cm



印銘



底部



御本手とは、朝鮮半島で焼かれた高麗茶碗の一種で、日本からの注文を受けて焼かれたものを指す。立鶴茶碗とは、將軍家光の描いた鶴を型にして、茶碗の前後に押した茶碗が本歌である。通常、御本手は表面にピンク色の斑紋が浮かぶのが特徴だが、本作品ではあえて唐津焼風に仕上げられている。また前後の立鶴は、頭部と頸部に白色絵具、尾と嘴に鉄絵具による彩色が施される。高台はヘラによる切り込みを入れて割高台とし、中央が尖る兜巾高台としている。高台脇に「赤ハタ」の瓢箪印と、「木白」印を捺す。内面には釉が擦れて剥落した部分があり、また外面は破損部分を金継ぎとしている。長年にわたり、大切に愛用されていたことが伺われる。

07 こくゆうまっちゃわん 黒釉抹茶碗 (木白作)

口径：13.0cm 器高：7.5cm



印銘



底部



箱蓋表面



箱蓋裏面



本来は轆轤ろくろ引きによって成形された端正な作品であったが、口縁部付近はわざと力を加えて変形させ、また一部に器壁の膨らみも見られる。乾燥・素焼きの段階で、意図的に歪みを加えて数寄好みとしたものだろう。さらに黒釉を分厚く漬け掛けにしているため、本作品は非常に野趣に富む仕上がりとなっている。一方で底部付近は本来の端正な形状を示しており、高台は高く、シャープに削り出されている。高台内部に「赤膚山」および「木白」の二重丸印が捺される。箱蓋外面右上に木白自身の筆で「抹茶碗」、内面左下に「冠山土かんざんど／木白」と書かれ、「木白」の二重丸印（高台内のものと同じ）が捺されている（共箱）。「冠山土」は大和郡山市大織冠たいしよくかんの土のことで、赤膚焼の試験窯が置かれた場所である（大織冠窯）。

08 住吉明神人形 (木白作)

高さ：14.2cm



背面



底（印銘）



木白の作品には、奈良の一刀彫り（奈良人形）を陶器に写したものがある。本作品は、能楽「高砂」のち後シテの住吉明神を象ったもの。木白は天保10年（1839）、周斎という人物に金五両を支払って金銀絵・紺色絵・錦絵の技法を学んでおり、その成果が存分に活かされている。狩衣には金泥かりぎぬで神亀じんきや四方襷よもだすきが描かれ、袴には桐文、冠には唐草文が、型押し成形の後に着彩されている。唐冠えいの片側と、本来持っていたはずの扇が欠損しており、また箱も付属しないが、底面右足裏の下に「赤膚山」および「木白」の二重丸印が捺されており、木白の作である。

09 奈良大仏わらび餅皿

口径：15.0cm 器高：2.9cm



(印銘)

底部



赤膚焼では茶陶を代表とする高級志向の製品のほかに、日常雑器も生産していたことが知られている。これらのうち土瓶や雪平鍋などは現代に伝わっていないが、わらび餅皿や火打焼皿はコレクターズアイテムとして珍重されたため、比較的数量多く残っている。わらび餅皿は、東大寺門前の茶屋で客にわらび餅を供するのに用いられた皿である。口縁部内側に鉄絵具で「なら大仏」「名物己らび餅」と書き、見込には大きく「柱くぐり」で有名な東大寺大仏殿の柱の絵を描く。そして柱の部分に「大はしら二丈廻り」と書かれている。高台内は露胎で、「赤ハタ」の瓢箪印が捺される。

10 春日御水茶屋火打焼皿

かすがおみずちややひうちやきさら

口径：15.0cm 器高：3.1cm



(印銘)

底部



春日御水茶屋で、客に火打焼を供した皿である。見込に鉄絵具で注連縄の下に立つ鹿と、杉の木が描かれている。また、鹿の脇には「春日御水茶屋／火打焼」と記される。高台内は露胎とし、ヘラで渦を描く「釘彫高台（巴高台）」としている。また、中央付近に「赤膚山」の印を捺す。火打焼は、春日大社の「ぶと饅頭」から派生したお菓子で、餡の入った生菓子のこと。



赤膚焼と奥田木白 展示品解説・目録

平成 29 年 12 月 26 日

編集・発行 大和郡山市教育委員会
大和郡山市北郡山町 248-4
